



Title	L. A. ムラトーリの『イタリア年代記(Annali d'Italia)』に関するノート その1 : 古代
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 70(3), p. 87-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

L. A. ムラトーリの『イタリア年代記 (Annali d'Italia)』

に関するノート

その 1

—— 古代 ——

イタリア語科 米 山 喜 晟

Le note sugli "Annali d'Italia" di L.A. Muratori (1)

Yoshiaki YONEYAMA

Nota I Rari sono i documenti per conoscere la situazione in cui furono scritti gli "Annali d'Italia". Attraverso le righe delle sue lettere che si trattano dell'opera, si ricercano i problemi principali che l'autore incontrava nel descrivere.

Nota II Da alcuni studiosi non è tanto valutata questa opera stessa e specialmente la parte che si tratta dell'età degli imperatori romani. Ma come Falco attesta, in questa opera ci appaiono molto francamente i giudizi maturi sugli uomini storici dell'autore. Vorrei rappresentare questi giudizi caratteristici attraverso le descrizioni degli imperatori romani in questa nota.

ノート 1 『書簡集』より見た『イタリア年代記 (Annali d'Italia)』の成立状況

L. A. Muratori の膨大な著作『イタリア年代記 (Annali d'Italia) ¹⁾』の成立について、著者の甥 (Gianfrancesco Soli Muratori) は、その『ロドヴィコ・アントニオ・ムラトーリ伝 (原題 Vita del Proposto Lodovico Antonio Muratori già Bibliotecario del Serenissimo Sig. Duca di Modena) ²⁾』の中で次のように記している。

「わが叔父 M. がイタリア史の古い事実について莫大な知識を有していたために、多数の文学者たちは、彼にイタリアの世俗の年代記を書くように促した。彼は1740年にこの企てに取り組み、西暦の元年より1500年までを書き進めた。それらは1744年 4 折版 9 巻で出版された。ヴェネツィアで印刷されたが、奥付ではミラノ版となっている。やがてドイツ語に翻訳されて、ライプツィヒで出版された。その後多数の人々が、彼よりもイタリアの事柄にくわしくない人がその通史を書いたりしないように、M. が我々の時代までの出来事を書き続けることを望んだので、彼はその仕事に再び着手し、1749年まで書き続け、既刊の 9 巻に 3 巻を書き加えた。³⁾」その後当初はフランス語版も同時に刊行される筈だったがが実現していないことや、その後ローマ版、ナポリ版、再度(ただし17巻で)のヴェネツィア—ミラノ版などが、この伝記が刊行された1756年 (満77才で

没した L. A. M. の死後 6 年目) までに刊行されたと記されていて⁴⁾、この著作がイタリア国内ではかなり売行きが良かったことが推察しうる。

この甥は同書の別の箇所、叔父のすばらしい能力を自慢した折、「『イタリア年代記』の最初の 9 巻を書くのに、1 年以上はかからなかった⁵⁾」と記したが、これには若干の誇張があるように思われる。というのは、1738 年 8 月 27 日にモデナからカメリーノの Filippo Camerini にあてた書簡の中で、「現在私は 401 年より 1500 年までの『イタリア年代記』をまとめています (sto compilando)⁶⁾」と記し、さらに Bertelli が引用している⁷⁾ 同年 12 月 12 日 ラヴェンナの P. P. Gianni にあてた書簡の中で「内密にお知らせしますが、私は今 401 年より 1500 年までの『イタリア年代記』を書いている所です (sto tessendo と表現する)。もしそれだけの寿命があれば、キリストの世紀の当初から記すでしょう⁸⁾」と伝えているからで、着手された時期は、少なくとも 1 年 3 ヶ月はさかのぼるからである。すなわち M. の 66 才の年に着手されている。

なお、M. の生涯を知るのに最も重要な資料の一つである、Matteo Cămpori 編の『書簡集』第十四巻の索引⁹⁾によると全書簡中で 82 回この作品について言及されている¹⁰⁾とある。私は本ノートでその記述の主なものをたどりながら、成立状況を具体的に眺めることにしたい。

p. 3813 および、p. 3838 は上述した著作中であるという報告だが、p. 4058 (1740 年 10 月 12 日) では早くも、「『イタリア年代記』を完成するために、私に残された部分はあと 1 世紀半に迫りました。その後私には作品に渦巻き装飾をつける仕事が残っています」とあり、すでに約 2 年間で 1350 年ごろに達していることが分る。さらに 1741 年 2 月にはまだ進行中 (p. 4111) だが、同年 6 月 22 日にはヴェネツィア存住の Rubeis あての手紙で「それ (『イタリア年代記』) が、そちら (ヴェネツィア) で印刷されるでしょう¹¹⁾」とあってすでに当初予定した 1500 年までの記述が完成していることが分る。同年 7 月の手紙で珍しく多少内容に触れた一文がある。「私の『イタリア年代記』が印刷され始めるというのは事実ですが、私が果たした重大な任務の出来栄に神が寛容にご満足されますように。少なくとも私は、真理への愛が足りないといわれないだけのことは、確保したつもりですが。¹²⁾」ところで実際に印刷が始まったと記されるのは、翌 42 年 5 月末で、さらに同年 8 月の手紙には、次のように奇妙な懸念が打明けられているのである。「私はこの度再校をあなたの許に提出することになりましたが、そのことをこの上なく喜んでいて次第です。今あなたにご了解いただきたいことは、私が Pasquali 氏あるいはヴェネツィアの印刷所を利用するに当って抱いた唯一の難点が、他でもなく、これらの人々が彼らの都市つまりヴェネツィア共和国の名誉についてどの程度執着しているのか分らない、という点だったのです。私は真実だと信じていないことで他人にサービスしたくはありませんし、誰かにへつらうつもりもありません。私は Pasquali 氏に、(印刷された) すべてを私の許に送るように約束させ、さもないと印刷を他の都市にまわすと伝えました。もし私がこうした作品で自分の許可なしに、一部が削除されたり、変更されているのを発見したら、残りの校正刷の発送を停止するでしょう。私があなた方の栄光に充ちた共和国について、どれ程常に敬意を表し、尊敬を抱いて語って来たかはお分りいただけるで

しょう。もし人々がそれ以上を求めるならば、この作品は他の国で印刷されることになるでしょう。¹³⁾」文字通りに取ると、印刷所の人々がヴェネツィアを愛する余り、勝手に M. の原稿を削除したり、訂正したりすることを懸念しているようであるが、勿論当時の印刷業者らが作品の内容にまで干渉することなどありえないので、要するに M. の原稿の検閲に当たった市の担当者に対するジェスチュアであることが分る。事実一度はこのように強気な態度を示しておきながら、同年 9 月 7 日には、同一人に対する手紙で、「あなたのいとも丁重なる 2 通のお手紙への返事として、私の『年代記』の出版にご協力下さることに対して、私は心から感謝を捧げます。ご当地において好ましくない事柄にお気付き下さった節は、どうか私にお知らせ下さい。変更するなり訂正するなりいたしますし、私に真実の裏付けがあると思えない場合には、他の典拠による注記を若干加えて訂正することも常に可能なわけです。それにあなたは、いつも私がヴェネツィア共和国の栄光にかぎりない敬意を抱いてきたこともお分りでしょう¹⁴⁾」という線まで後退する。しかし最後にはヴェネツィアで印刷しながら、ミラノで印刷した体裁にしていることは、すでに甥の『伝記』の中で見た通りである。この時の書簡の相手、ヴェネツィアの Angelo Calogera 宛に、M. は生涯に 59 通もの書簡を出し、同じく 59 通の書簡を受け取っている¹⁵⁾。彼にどの程度の権限があったのかは分らないが、その駆け引きだけでも論文が書ける程の頻繁な交渉ぶり、Calogera も一見やかましいことを言いながら、実際には M. および Pasquali に対してかなりの協力ぶりを示しているように感じられる。それにしてもイタリアでは比較的精神的自由が保証されていたとされているヴェネツィアですら、その印刷所を利用するためだけで、これだけの配慮を要したという事実を忘れてはならないであろう。しかし M. はそうした制約をうまく切り抜けるだけのしたたかさに十分恵まれていたのである。勿論ヴェネツィア共和国が与えた便宜も忘れてはならない。

p. 4326, p. 4358, p. 4366 等々一連の書簡で、M. は、印刷所 Paquali が、折角最初の何巻かを印刷し終ったのに、全巻揃うまでは渡そうとしないことをしきりにぼやいている。その一方で、内容を簡単に予告して、読者の期待をあおる。そしてついに M. の催促に負けたらしく、p. 4464 の F. Camerini あての書簡 (1743 年 8 月) で、「本屋の Pasquali は、『年代記』の 2 巻までをあなたにご利用いただこうと答えて来ました。もう 6 巻まで出来上っておりまして、彼は今まで印刷された分を発行したいと考えています」とあり、いよいよ同書の一部が世に出ることになったことが分る。しかしその後も出版の予告が続き、p. 4564 ではとくに印刷が完了された筈の 5 巻を印刷中だなどという記述もみとめられる。なお p. 4629 には、同書の値段についての問い合わせに対する返事があり、I～V 巻で 100 paoli (各 20 paoli)、ヴェネツィアでは各 15 lire だが、特に同書簡の相手 G. Brunassi には 11 lire でお分けすると伝えている。M. の書簡にはこうした値段の連絡などが度々見られ、膨大な数の書簡の一つの目的は、自著の宣伝やセールスおよび注文取りであったことが分る。あれだけ多数の高価な書物を出していれば、とても献本などしきれないのは当然で、M. にとって決して不名誉なことではない。そしてようやく p. 4707 の A. G. Bianchini にあてた 1744 年 12 月末日の書簡で、全巻の印刷が終りあとは 9 巻の索引を残すのみとなったとい

う報告に辿りつく。すでに指摘した通り、M. はその書簡の中で、自著の内容についてはほとんど触れない。第一作品そのものについて長く記すことも珍しく、最初の9巻に関しては、これまで記したのを除くと、次の一文が稀有な例外ともいえる。「私はこれまで自分の『年代記』が歓迎されていると聞いていますが、あなた（フィレンツェの Giovanni Lami あて、1744年9月の手紙）がその御才筆で何らかの仕方で保証して下さい、一そう大きな期待が持てそうです。と申しますのは、私はぼんやりしておりまして(per mia melensaggine), わが身に係わる事柄は成行きまかせにしているからです。(中略)神様が、ある人々に関係した事柄で、私の真実を書いたために、その人々の不快を催させたりはなさいますように。¹⁶⁾」M. が自分の愚鈍さ(melensaggine)などを嘆くのは誠に不似合いであるが、書物の宣伝を頼んでいる点を考慮すると、ぼけている所ではないことが分るであろう。いずれにせよ、この膨大な著作の本体をなす、1500年までを扱った9巻に関しては、執筆よりも、印刷やその販売の方に、M. はその書簡の中の紙面をはるかに多く割いているといえる。

p. 4758 のウィーンにいる D. B. Colombi あての書簡(1745年2月)で、M. は読者から『年代記』を現代まで書き続けよとの注文が相継いだため、それに着手したことを告げる。「私が書き終わるかどうかは神のみがご存知ですが(中略)、なるようになるでしょう」と心細いが、p. 4785では、ドイツ語訳が出そうだと記す。p. 4788では、もし書き続けられれば、今の法王を讃美したいなどと、殊勝なことを記しているが、相手がローマの F. Tamburiniであることを考えると、法王 Benedetto XIV の配下への影響が勿論計算されている。コマッキオの領有権をめぐる論争¹⁷⁾で法王庁との関係が悪化し、苦勞し抜いた M. が当時の近現代史を着手した以上、法王の庇護は不可欠であった。幸い Benedetto との関係は極めて良好¹⁸⁾で、現代史執筆などという危険を冒しえたのも、こうした状況およびローマにも Tamburini や Chiappini 等良き理解者が存在してその弁護を引受けていたためであるといえるだろう。しかし Michele Monaco がその「ムラトーリとローマの『文学者たち』との関係¹⁹⁾」において、第三の局面と規定したこの時期においても、ローマには頑固な反ムラトーリ学者たちの一群が存在して、M. を悩まし続けた。『イタリア年代記』こそ彼らに取っては最大の好餌で、M. Monacoによると、「『年代記』に対抗した反動の機関となったのは、再刊された『ローマ文学者新聞 (Giornale de' Letterati di Roma)』であった。一人の論争家が、1745年から1751年まで、M. の作品の各巻が出る毎に、その紙面を通して几帳面に力強く反論し続けたが、その論争家とは Fontanini (コマッキオ論争の論敵) よりもはるかに教会史に精通している修道院長 Gaetano Cenni であった²⁰⁾」と記されている。M. がこの新聞が再刊された年の8月31日に、ローマの Tamburini にあてて珍しく長く『年代記』に触れているのは、まさにこの批判に対する弁明に他ならない。「私には『年代記』の長々とした文章を読んでおられるお暇などあなたに残されていようとはとても考えられませんので、きっと何者かがそれについての不当な姿をあなたのお耳に吹きこんだのだろうと想像いたしました。それは、もし私に悪意を抱いているのでないとすれば、いつも他人の本の中であら探しばかりしている手合い

に違いありません。その些細な傷は、多くの箇所、あるいは全体と関連しているのでなければ、ほんのわずかな手間で直せるようなものです。もしもあなたが『年代記』をお読み下されば、私がいたる所で教会およびローマ法王の地位を敬い、支持し、擁護していることや、法王の地位に対立する表現など見当らぬことがお分りいただけるものと確信しております。と申しますのも、私は何人にも劣らずローマ教会を敬い、かつ愛しているからです。なお法王たちの人格（それは教会とは別物です）や習慣や行動などにつきましては、善良なお方も邪悪なお方もあり、また善悪両面をそなえていたお方もおられますことは明白な事柄です。善良な方々の方が、比較にならない程多数存在しておられました。私は『年代記』の中で、何世紀にもわたってその方々の徳と功績をほめて参りましたが、それに値し、かつ真実だったからです。邪心のある者はそういったしません²¹⁾と記した後、M. は特に10～11世紀と、アヴィニョン時代と、ルター出現に責任ある15～16世紀の法王たち（特に Alessandro VI, Giulio, Leone, Clemente の名を挙げる）については批判的に記したが、それは正当であり、むしろまともな歴史家なら避けることのできないことだ（「名誉ある歴史家なら、彼らの行き過ぎや欠点を報告し、非難しないわけにはいかない、何故なら教会にとって有害すぎるから²²⁾」）と反論している。さらに M. に従うと、16世紀半ば以降善良な法王が相次いで現われ、Innocenzo XI 世以降、M. 自身の時代にまで、常に聖徳は高まる一方であったと評価されている。こうした評価は、現代人にとっては、17世紀以降に対して甘すぎる感もないではないが、M. 自身の信念に近いものであったといえよう。p. 4866 の Chiappini にあてた、「御当地では、悪しき法王たちについて私があまり良く言わなかったために、私の『年代記』の悪口がいわれていると伝えられました」という一文なども、同じ批判に関するもののようである。しかし M. はこの問題については、作品の末尾で最終的に答える²³⁾ ことにして、書簡ではその後ほとんど触れていないようである。なお同年の暮12月21日に、フィレンツェの G. Lagomarsini 宛に、昔のローマ教会の典礼書について解説し刊行するように、前年法王庁の依頼を受け、すでに資料も受取っているが、『年代記』の続きを執筆するため、仲々着手できないでいると記され²⁴⁾、この時期法王庁との正式の関係は常に良好であったことが分る。

pp. 4910, 4920, 4926 で、Matteo Meloni との間に、書物の発送や製本（紙に何か支障が見られたとか、火の影響があったとか記される）に関する文通が交わされ、やはり出版実務に関する配慮が認められる。

p. 4937 では、まもなく1745年に達し、この仕事を（1740年来ヨーロッパ諸国をまきこんでいるオーストリア継承）戦争の悲劇の描写で終りたくないという一文（1746年3月11日付）がみられ、また p. 4941 では、例のローマの Tamburini にあてて、「すでに『年代記』の布地は仕上りましたので、ついに『典礼書』にとりかかります」（1746年3月20日）と記される。その後若干資料の問い合わせ（pp. 4947, 4957）などをはさみつつ、p. 4946 の悲劇の終りまで書きたいとか、p. 4965 の本年度（1746年）の分を残すだけだが、和平のニュースも記すかも知れないなど、きりの良い所で切りあげたいという文章が何度も現われる。p. 4999 では、さらに『年代記』を続けるなどと

記され、M. はやがてアーヘンで結ばれる和平を心待ちにしていることが分る。一方、p. 5089 ではローマの Chiappini にあてて、Vitale²⁵⁾ という人物が『年代記』の告発を続けているが、好きにやらせておきましょうとも記す。1748年10月ようやくアーヘンで和約が結ばれ、イタリアにも一応平和がもたらされることとなり、M. は p. 5310 で、「神がお望みならば、今年中に最終的な和平までの残りの分が出版されるでしょう(1749年3月12日)」と記し、やっとな年7月3日付の書簡に「今残りの3巻の最終巻が印刷中です。これはこの一年に結ばれ実施された和平で終わっています²⁶⁾」という一文が現われる。pp.5379, 5387, 5388 等も同趣旨で、p. 5400ではその各巻 (tomo) が 10 paoli と予告されている。最初の9巻はすでに見た通り、各巻が 20 paoli で、後の3巻は半値である。1500年に前9巻をあて、約250年に後3巻をあてているので、前9巻には各巻170年程度、後3巻には各巻80年程度が割かれていて、値段的にはほとんど各年が均等であることが分る。なお M. が書簡で『年代記』に触れているのは、Càmpori の索引によると、p. 5400 が最後だとされている。

以上、若干とりとめもなく、書簡集に現われた『年代記』の進捗状況をたどって見たが、大部分が簡潔きわまる、主として出版実務に関わる言及であるにもかかわらず、検閲、非難、告発等様々の心労に悩まねばならなかったことが分る。ただし Vitale に対しては勿論、Cenni に対しても、M. は正面切って争うつもりはなかったようで、M. Monaco は、M. の作品末尾で記された法王に関する記述についての「彼の弁明の口調は、まだその思想において明晰で断乎としてはいるが、精力において老い疲れ(後略)²⁷⁾」していると評し、他方甥の G. Soli. は、M. が「私の『年代記』の方が、『ローマ新聞』よりも長く残る²⁸⁾」と余裕を持って笑いとばしたとしている。必ずしも矛盾した見方ではないが、M. がある程度の非難を十分承知の上で著述したことはいうまでもない。

なおこの作品に関しては、現代の研究者の間でもかなり評価が分れるように思われる。S. Bertelli²⁹⁾ や G. Compagnino³⁰⁾ はかなり不満を抱いているのに対して、M. 研究の第一人者で近年物故された Forti³¹⁾ 教授や Calcaterra³²⁾ 等は、その価値をより重視している。批判されるのは無理もない事情もあるが、やはり余りにも短期間に、容易に書かれたという印象が、多少影響しているのではないかとも思われる。M. にとって『年代記』執筆は実際ごくたやすいことであつたのかも知れないが、書簡などでもう少し制作上の工夫や苦心を吐露していれば、おそらくロマン主義者たちの評価³³⁾ も変り、今日の評価にも影響しているのではないかと想像されるのである。

ノート 2 L. A. ムラトリーの帝政期ローマの描写と皇帝の評価

本『年代記』の中における帝政ローマの部分は、必ずしも重要な部分だとはいえないかも知れない。たとえばムラトリー研究の権威で、前代の Bertoni¹⁾ らと共に、M. に対して最も好意的な Forti が、本作品の価値として列挙しているのは、「Baronio および神学的歴史記述に対する論争、ローマやビザンチンに比してゴート族、ロンゴバルド族を再評価したこと、法王庁の世俗的活動に対する遠慮のない見方、国家理由や侵略精神への不変の拒否、人民の平和と幸福を常に希

求していること²⁾』といった要素で、多少は帝政期に関係しているとはいえ、やはり東ゴート族の治世以後の中世が最も重要視されていると見なしうであろう。事実 *Annali d'Italia* という標題にもかかわらず、後にも示す通り、皇帝の行動に焦点が当てられているため、皇帝がイタリアを離れると、イタリアは視野の外に出てしまうことが少なくない。殊にコンスタンチノーブルに新都が建設され、同時に西ローマ帝国の皇帝がローマ以外に居を構えていた時期には、ほとんどタイトルそのものが忘れられたかのような内容になっているのである。また資料的に見ても、M. は帝政期に関しては、Suetonio (以後ローマ市民についても、統一のため M. にならいイタリア表記に従う) や Tacito など、ほぼ常識的なローマ史の文献を用いている。勿論 M. 自身があらわした *Novus Thesaurus Veterem Inscriptionum*³⁾等によって、碑文、墓碑、印章などといった考古学的資料を採用して、新しい科学的方法の模索が行われていることは否定できないけれども、時代的に *Rerum Italicarum Scriptores* や研究論文集 *Antiquitates Medii Aevi* を十分に駆使しえないのはやむをえないことで、その分だけ純学術的な評価が低くなるのは当然であるといえるだろう。だから、文体のゆるみや叙述が逸話に流れていることなどこの作品の欠点を容赦なく指摘した Bertelli は、Maffei の書簡の「M. はここでは自分の海を航海していない⁴⁾」という文章を含む帝政期の叙述を否定した箇所を引用した後、「だから我々は『イタリア年代記』の最初の2巻(全12巻本の場合の2巻で、我々の版では6巻の末尾に近い)をとばそう。というよりはむしろ、Teodosio の選出、つまり379年まで跳ぶことにしよう⁵⁾」と、帝政期476年のほぼ8割を全く無視している有様である。

しかしこの作品に関して、別の角度から眺めることも不可能ではあるまい。たとえば Forti とならぶ M. 研究の大家 Falco は、この作品を「ことばの現代的な意味で、偉大な歴史書だとするのはやはり困難⁶⁾」としながらも、「Guicciardini の時代以来最初のイタリア史の偉大な試みで、その後の歴史記述の大部分の筋書として役立つことになるであろう。多少雑然とした情報の積み重ねの中で、そのあちこちに明哲な制度的構図とか、たとえば1746～7年のジェノヴァ市の蜂起と防衛のような見事な叙述の数ページとか、あるいは Zenobia 女王、法王 Giulio II、Richelieu 枢機卿のごとき君主や大臣たちの生き生きとした肖像、1631年のヴェズビオ火山の噴火のような天災の活写などに出くわす。しかしこの散文においてさらに印象的で、同時代の検閲者の一人である Gaetano Cenni 修道院長を一そう憤激させたのは、その語り口の素朴さであり、その中には狡猾で庶民らしくふるまい、いくらか粗野で露骨な機知を弄し、豊かで色彩豊富でしかも傍若無人な逸話を無遠慮に語ってやまない人間ムラトリーがしょつ中姿を現わすことである⁷⁾」と評している。勿論 Falco には、森田鉄郎氏が紹介された⁸⁾、ロンゴバルド族重視に端的に現れている M. 独自の史観を明確に把えた立場があり、その『年代記』評価も単にこうした側面にとどまらないことはいうまでもないが、私は F. が先の一文で示した人間通の歴史家としての M. を重視する立場をも、看過すべきではないと考える。私は本ノートにおいては、Bertelli によってほとんど大部分が無視されてしまったこの作品の帝政ローマ期の部分をあえて取り上げ、特にそうした人間観に関わ

りのある側面を考察しておきたい。

ところで、本書の帝政ローマ期に関する叙述は、その大部分が皇帝の事蹟、とりわけ政権争いと政治の仕方を扱っているといっても過言ではなさそうである。そのことを裏付けるのは、次に示す表 I で示された、政権別の年平均ページ数である。M. は各年の冒頭に、西暦年数、法王名とその就任以来の年数、皇帝名とその就任以来の年数、前期執政官名(後期執政官は本文中で示す)をまず列挙し、さらに本文中で近衛隊長、ローマ市長官名なども記し、必要に応じて推定の根拠、交代時期(執政官のそれも必ずしも一定ではない)などについてかなりの紙数を割いている。その際に、印章学や墓誌に関する知識を披歴し、些細な問題のために、諸説を列記する場合すらある。この点で多少のアンバランスがみとめられなくもない。さて皇帝別に(複数の場合はその組合わせ別に)、叙述に割り当てたページ数の平均を示した第 I 表によると、皇帝毎に割り当てられたページ数が大幅に変動する。それは M. が、すでに述べた通り、主に皇帝の事蹟を扱い、特にその交代の過程をくわしく論じているからで、皇帝の候補者が乱立して争った場合、当然多くのページが割かれざるをえないのである。なお皇帝が交代した場合には、暗殺や戦争などといった交代の経過は、通常次期皇帝の初年度に記される。だから帝位就任に苦勞した皇帝ほど、多くのページが与えられている。さらに皇帝自身がしばしば起こす残虐行為や、その性格についてもかなり紙数が割かれ、また蛮族や隣国相手の戦争もかなりくわしく記される。勿論善政や建築、旅行等も記され、そうした皇帝および戦争に関する記事に較べると、キリスト教弾圧、悪疫流行、飢饉、地震その他の天災等に関する叙述は、事実の記載にとどめられて、やや影がうすいように思われる。M. の筆を通して受けた印象では、ほとんど同じ時期でも、皇帝次第で時代の様相は一変するようである。それも必ずしも善から悪に変わるだけではなく、悪から善に変化する可能性も同様にみとめられるといえる。こうした指導者偏重の史観は、少くとも我々のようにある時代の持つ経済的制約とか限界などに馴染みすぎた人間にとっては、まさに非科学的なもののように感じられるのであるが、M. は我々程時代の諸条件に束縛されていないという印象を受けるのである。このように指導者を重視する考え方は、イタリア文学史をさかのぼると、Dante の『帝政論』や Machiavelli の『君主論』等々様々の古典より発して、時代を下るとリソルジメント期の政治理論やさらに Pareto や Mosca らのエリート理論を経て、一方ではファシズム的理論に、他方では Gramsci の『新君主論』に代表される左翼の政治理論に結びつく。それはファシズム期のドゥーチェ崇拜の裏付けとなるなど、危険な性格を持っている反面、科学的な仮面を持った歴史決定論や宿命論に対するアンチテーゼでもありうる。たとえば Malaparte の『クーデターの技術⁹⁾』などという作品はまさにこうした文化的伝統の中から生れた書といえるであろう。いずれにせよ、イタリア史に関して、古今を通じ今日も含めて尚最も文献に通じていたと見なされている M. が、やや守備範囲からはずれているとはいえ、こうした皇帝中心の叙述で帝政期を書き切ったという事実は、やはり軽視してはならないものと思われる。

さて個々の皇帝を眺める以前に、まず『年代記』全体のはじめと、帝政期の終りの部分を眺め

第Ⅰ表 ※印はノート2の註7)の抄本中に収録された時期である。

皇 帝	西暦年	巻	ペ ー ジ	年平均	10以上
Ottaviano	1～13	I	1～58	4.46	
Tiberio	14～36	〃	59～163	4.56	※
Caligola	37～40	〃	164～205	10.50	○
Claudio	41～53	〃	206～286	6.23	※
Nerone	54～67	I～II	286～315, 3～58	6.14	※
Galba	68	II	59～76	18	○※
Galba, Ottone, Vespasiano, Vitellio	69	〃	76～111	36	○
Vespasiano	70～78	〃	112～154	4.77	※
Tito	79～80	〃	155～168	7	
Domiziano	81～95	〃	168～224	3.80	
Nerva	96～97	〃	224～245	11	○
Trajano	98～116	〃	245～314	3.68	
Adriano	117～137	II～III	314～344, 3～41	3.57	※
Antonio Pio	138～160	III	42～111	3.04	※
Marco Antonio, Lucio	161～169	〃	111～155	5	※
Marco Antonio	170～179	〃	155～204	5	※
Commodo	180～192	〃	204～269	5.07	
Pertinace, Didio Giulino, Settimo Severo	193	〃	269～294	26	○
Settimo Severo	194～197	〃	295～330	9	※
Settimo Severo, Caracalla	198～207	〃	331～376	4.60	
Settimo Severo, Caracalla, Geta	208～210	〃	376～385	3.33	
Caracalla, Geta	211～212	〃	385～399	7.50	
Caracalla	213～216	〃	399～422	6	
Macrino	217	〃	422～436	15	○※
Macrino, Elagabalo	218	〃	436～448	13	○
Elagabalo	219～221	〃	449～462	4.66	※
Alessandro	222～234	III～IV	463～475, 3～57	5.23	※
Massimino	235～237	IV	57～76	6.66	
Massimino, Gordiani I～III, Pupieno, Balbino	238	〃	76～96	21	○
Gordano III	239～243	〃	97～110	2.8	
Filippo,	244～246	〃	111～122	4	
Filippo, Filippo Juniore	247～248	〃	123～129	3.5	
Filippo I～II, Decio	249	〃	129～135	7	
Decio	250	〃	135～140	6	※
Decio, T. Gallo, Hostiliano	251	〃	141～146	6	
T. Gallo, Hostiliano, V. Gallo	252	〃	146～151	6	
T. Gallo, G. Volsiano, Valerio, Gallieno	253	〃	151～156	6	
Valerio, Gallieno	254～260	〃	157～188	4.57	
Gallieno	261～267	〃	188～235	6.85	
Claudio II	268～269	〃	235～250	8	
Claudio II, Quintillo, Aureliano	270	〃	251～257	7	
Aureliano	271～274	〃	258～294	9.25	※
Tacito	275	〃	294～303	10	○

L. A. ムラトーリの『イタリア年代記 (Annali d'Italia)』に関するノート

皇 帝	年 代	巻	ペ ー ジ	年平均	10以上
Floriano, Probo	276	Ⅳ	303～309	7	
Probo	277～281	〃	309～330	4.4	
Probo, Caro	282	〃	331～335	5	
Caro, Carino, Numeriano	283	〃	336～339	4	
Carino, Numeriano, Diocleziano	284	〃	340～344	15	○
Carino, Diocleziano	285	〃	345～349	5	
Diocleziano, Massiminiano	286～304	〃	349～421	3.84	※
Costanzo, Galerio	305	〃	422～430	9	※
Galerio, Severo, Massenzio, Massiminiano	306	〃	431～448	18	○ ※
Galerio, Massenzio, Massiminiano, Eraclio, Costantino I, Licinio	307～310	V	3～28	6.5	
Massenzio, Costantino, Licinio, Massiminiano	311～312	〃	29～56	14	○
Costantino, Licinio, Massiminiano	313	〃	56～75	20	○ ※
Costantino, Licinio	314～323	〃	75～129	5.5	
Costantino	324～336	〃	129～191	4.84	※
Costantino II, Costanzo, Costante	337～339	〃	191～214	8	※
Costanzo, Costante	340～349	〃	215～249	3.5	
Costanzo	350～360	〃	249～353	9.54	※
Giuliano	361～362	〃	353～386	17	○ ※
Gioviano	363	〃	386～404	19	○ ※
Valentiniano, Valente	364～366	〃	405～441	12.33	○ ※
Valentiniano, Valente, Graziano	367～374	V～Ⅵ	441～451, 3～31	6	
Valente, Graziano, Valentiano II	375～377	Ⅵ	31～49	6.33	
Graziano, Valentiano II	378	〃	50～64	15	○ ※
Valentiano II, Teodosio, Arcadio	379～391	〃	65～178	8.76	※
Teodosio, Arcadio	392	〃	178～190	13	○ ※
Teodosio, Arcadio, Onorio	393～394	〃	190～208	9.5	
Arcadio, Onorio	395～401	〃	208～272	9.28	※
Arcadio, Onorio, Teodosio II	402～407	〃	272～300	4.83	
Onorio, Teodosio II	408～422	〃	301～402	6.80	※
Teodosio II	423～424	〃	402～412	5.5	※
Teodosio II, Valentiano III	425～449	Ⅵ～Ⅶ	413～464, 3～73	4.92	※
Valentiano III, Marciano	450～454	Ⅶ	73～121	9.8	※
Marciano, Avito	455～456	〃	121～150	15	○ ※
Leone, Maggioriano	457～460	〃	151～169	4.75	
Leone, Severo	461～465	〃	169～188	4	
Leone	466	〃	188～191	4	
Leone, Antemio	467～471	〃	191～219	5.8	
Leone, Olibrio	472	〃	219～226	8	
Leone, Glicerio	473	〃	227～231	5	
Zenone, Nipote	474	〃	231～237	7	
Zenone, Romolo Augustolo	475	〃	237～244	8	
参考 Zenone, Odoacre (王)	476～490	〃	244～311	4.53	

てみることにする。全体に比してきわめて短い序文の後に、次のような文章で、本『年代記』は書き始められている。それは以後の皇帝中心の叙述を象徴するような書き出しともいえる。

「ローマ共和国の自由は、それ以前は軍隊の將軍を意味していたインペラドレーという控え目な称号をかかげて、ローマに初めて君主制を導入した Giulio Cesare の抑圧の下で、すでに大部分崩壊していた。Cesare が陰謀家たちの犠牲になったことで、自らの野心の酬いを受けたのだというべきなのかどうか、私には分らない。ただ私にはっきりしているのは、彼が生前大多数の人々に憎まれた君主でありながら、死後にはとりわけ単独者の支配に適應しはじめた人々によって、弁護され愛されたということである。またそれと同じく分っていることは、この君主がたしかに多くの美点に恵まれていたということで、もし彼の名誉が祖国に抑圧を加えたという汚名によって汚されていなかったら、古代を通じてこれ程の信望を獲ち得た人は少なかつただろうということである。Gaio Ottaviano もしくは Ottaviano は彼によって養子に選ばれた。我々は彼をむしろ Cesare Augusto という名前で知っているが、まだ若かつたにもかかわらず、巧みに元老院の期待を裏切ることができた (*seppe ben deludere l'espettazion del senato*)。彼は共和政を再建するためにかつがれたのだが、軍隊を委ねられるという幸運を利用して再びローマを隸属させ、あの帝政を確立させた。その国家は何世紀も続いた後、最後に蛮族と力の前に屈服した。Ottaviano は Giulio Cesare によって着手された政治の新しさに元老院とローマの人民を慣れさせ、同時に G. C. が出会ったあのいまわしい最後から逃れるために、立派な政策を必要とした。¹⁰⁾」

その後、M. は Ottaviano が2人のすぐれた協力者にたより、元老院を尊重し、同時に民衆の愛をつかむため努力しつつも、他方では軍隊、特に近衛兵を甘やかしながら、見事に地位を確立した経過を示すが、この元年の記述に11ページしか割かれておらず、また Ottaviano の治世の年平均ページ数がわずか4.46と全部で85期間中ゆうにベストテンに入る程低いという事実から、M. がこの皇帝について、初代であり、帝政の創建者であるにもかかわらず、そしてきわめて重視していたことは確実であるにもかかわらず、かなり簡略に叙述していることが分る。

ついでに西ローマ帝国滅亡の年476年の記述を眺めると、前年息子を皇帝 Romolo Augustolo として即位させ自らは大守の地位についた Oreste が、アフリカのヴァンダル族の王 Genseric に使いを送り、同盟を結ぼうとしている時、Odoacre が Eruli, Turcilingi, Rugi, Sciti その他の民族をかき集めてイタリアに侵入。Oreste はできる限りの兵を集めて Lodi 附近に向ったものの兵力が違いすぎて会戦前に逃亡し、「パヴィーアに籠った。それはかなり堅固な都市で、そこが安全な避難所になるものと期待したからだ。やって来た Odoacre は、市を包囲し、ついにこれを攻め落とし、兵士たちに略奪を許した。(中略) この時大守の Oreste は Odoacre の手中におち、生命は救けられたかに見えたが、ピアチェンツァへ連行されると、8月28日に殺された。¹¹⁾」さらに皇帝自身に関した部分は、次の通りである。「Odoacre はラヴェンナに入り、さらに旅を続けたが、ローマに入城するのに何一つ困難に会わなかった。これら二つの都市のいずれかで Augustolo を捕えた。しかし彼がまだ幼年であることを憐れみ、またかつてその父 Oreste と交わした友情を

思い出したのか、その生命を助けてやっただけではなく、そこで親族と気楽に暮せるよう金貨6000ソルディの年金を約束して、カンパーニアの Lucullano とよばれている砦に監禁した。Anonimo Valesiano のこの「親族と」ということばは、幼帝の父がこの地方の出身だということを示している。かくして古人の見解に従うと、ローマの皇帝権は Romolo によって始められ、Augusto によって確立され、この不運な Romolo プラス (ed を加える) Augustolo によって終わった。¹²⁾「O. は東ローマの Zenone 帝を尊敬し、嫌われるのを心配して、西ローマ皇帝の称号を望まなかった。¹³⁾」

このように M. は一応西ローマ帝国の滅亡に触れはしているものの、その記述はすこぶる簡潔で、しかもいくらか冗談めいていて、詠嘆などは毛の先程も感じられない。M. はこの476年に一応13ページを割いてはいるものの、後半7ページを東ローマ皇帝 Zenone と Basilisco との抗争および年代の確定にあてていて、むしろそのことの方がくわしく論じられている。これによっても、M. がこの作品を執筆している際、時代区分を重大視しなかったことが推察される。といっても、M. は最初の予定では、「401年より1500年まで¹⁴⁾」記述するつもりで、当時はもう少し明確に対象とする時代のイメージを持っていたわけで、彼の頭の中に何らかの時代観がなかったというわけではない。それどころか、M. が人類全体の進歩を信じていたことは、ほぼ M. 研究者間の定説となっているといえる。しかし M. は本書の執筆に関しては、当初の予定を変更し、キリスト暦元年（それもキリスト生誕の年ではないことを承知の上で）より書き始め、1500年で終らず、同時代まで書き続ける。和平を待つ筆を置いている点では、全く構成上の配慮がないともいえないが、その点でもかなり便宜的で、要するに本書は任意の時点から書き始められていて、任意の時点で終わっているという印象が強い。また各年に関しても、事件の多い年は自然と叙述が長くなっているというだけで、それ以上にある年を重視している様子はない。その一つの証拠は表 I に見られる年平均のページ数で、勿論例外的な事例も少くはないが、概して戦乱の年に多くのページが与えられ、無事の年には記述が少ない。たとえば五賢帝の時代は、Nerva 帝を除くと全て5以下となっている。記述されている事柄が少いから善政だとは言えないが、少くとも比較的無事だった（帝政末期についてはかなり省略も見られるようだが）と予想しうるであろう。少くとも帝政ローマの時期に関しては、M. は時の権力の中心である皇帝に焦点をあて、その成立、移動、滅亡を明快な筆致で辿ることに主力をそそいだといえそうである。そこから生れたのは、解析幾何学的と呼んでも差し支えなさそうな、かなり単純化された皇帝の権力の軌跡だと見なしえよう。M. は驚異的な速度で約1750年間を辿ったが、それはおそらく、Cartesio¹⁵⁾ が危険視されている分だけ有効性を有していたこの時代においてのみ企てられることができた、一個の明瞭で簡潔な歴史叙述の試みだったといえるのではないだろうか。

さて最後に、M. が描いた皇帝像を実地にいくつか取上げた上、その内に認められる M. の人間観を眺めることにしたい。記述の都合上、善帝、悪帝および後世の評価が一定せぬ軍人皇帝の代表を順次取上げる。善帝としては五賢帝中 Trajano, Adriano, Antonio Pio, 悪帝としては

Tiberio, Commodus, 軍人皇帝としては Vespasiano, Diocleziano, Massiminiano, Costantino を取り上げる。

(1) Trajano 「Trajano は (Domiziano よりも) 多数の軍団に守られていたが、とてもよく訓練されていて、軍規正しく行進させたり休ませたおかげで、民衆に対するあの軍事的負担は軽いものとなった。¹⁶⁾」「伝えられる所によると、皇后はローマ帝国の属州において通常人民のヒルとなっていた貢納品や税金の徴収官による苛斂誅求ぶりを知らされ、こうした配慮を要する問題で夫が無視されていて不正を許していることが、結果としてその評判を傷つけていると夫に訴えた。すると Trajano はこの問題と真剣に取り組み、財政も軍備と同様、その増大によって他のすべての分野をやせ衰えさせるという事実を認識して、その混乱状態を改善させた。¹⁷⁾」「さらに一そう万人の称讃に価している事柄は、彼が Tito や Nerva のやったことをより厳正に行い、Domiziano の下で多くの無実の人々を破滅させた、他人を中傷する告発者たちを裁判にかけ、罰するように命じたことである。また同様に、それまでローマ市民にとって恐怖の的だった不敬罪を廃止した。¹⁸⁾」「彼は以前と同様の愛想の良さと謙虚さと礼儀正しさを保ち続けた。望む人には誰にでも謁見を許したが、誰をも丁寧にもてなした。特に貴族を重んじて、主だった人には抱擁して口づけした。¹⁹⁾」「彼の食卓は皇帝としては質素だったが、彼自身とその時々招待された様々の選りぬきの賢人たちの上機嫌で味つけされていた。彼は自分の食卓に席の序列を作りたがらず、また自ら友人宅の食事や祭礼に出かけたり、病人を見舞ったり、時には友人の馬車に同乗することもいとわなかった。²⁰⁾」「彼は寛大さや愛想の良さと、悪人を処罰したり、行政官の不正をただしたり、争っている都市間を調停する際のきびしさや一貫性とをかね備えることができた。彼の治世には、刑事裁判で欠席者に判決が下されたり、それ以前によく行われたように、単なる容疑だけで誰かが罰せられるようなことはなかった。²¹⁾」「彼は元老院に赴くと、自分が決して気を悪くしないことを保証して、誰に対しても自由かつ率直に自分の感情を述べることを許した。²²⁾」「(ダキアの戦争に出陣した時) Dione はさらにこう言っている。Trajano はこうした機会に比類のない勇気と賢明な行動を示した。その結果彼の模範が兵士たちを競争に、つまり多くの危険に身を投じて最も勇敢な行動を行う競争に駆り立てたのだと。²³⁾」「美德の敵であった Nerone や Domiziano の治下でキリスト教が迫害されたとしても、誰も驚くまい。しかしキリスト教信仰のみがその女王である美德を愛していた君主 Trajano が、キリスト教の迫害者だと知ったら、きっと驚く人がいるだろう。しかし疑いなく、彼の治世に神の教会は三度目の迫害を受けた(中略)。Trajano は新しい宗教の導入者に対して、古い法が厳密に適用されることを命じかつ許可した。²⁴⁾」「Trajano といえども、あらゆる欠点と無縁だったわけではない。Dione, Aurelio, Vittore (以下2人略) は、彼が時々呑み過ぎたと一致して述べている。しかし彼が酒に酔っていた時に、その義務に反するような行為を犯したという例は知られていない。それどころかの Vittore のことばを信じるならば、彼は自分が何らかの宴会に加わった後には、自分の命じたことを無視せよと命令していたという。²⁵⁾」

(2) Adriano 若い頃から才能豊かな野心家で、百芸に通じており、その下で文芸が栄えたが、「皇帝として優越していたように、才能や知識でも人よりすぐれていると自惚れていたので、自分よりすぐれていそうな人を嫉妬してはいじめ、その労苦の成果にケチをつけたり迫害する始末で、Omero より Antimaco をほめたり(後3例略)して後生笑われた。²⁶⁾」「彼にはたえ間ない移り気、一貫した一貫性の欠如がみられる。残酷かと見ると寛大そのものになる。真面目深刻かと見ると陽気な道化師になっている。貪欲であると同時に気前が良く、誠実かと思うと人をだます。すぐ人を愛するが、たちまち愛は憎しみに変る。²⁷⁾」「(旅から)ローマに戻って来た彼は、まるで私人のように執政官や法務官にゆだねられるべき訴訟に登場し、友人の宴会に顔を出し、友人が病氣になった折は見舞いに行った。それも一日に二度も三度も見舞うのだ。相手は元老院議員とは限らない。騎士どころか解放奴隷クラスの連中まで見舞いに行き、親切なことばではげまし、必要に応じて誰かれなく助けた。²⁸⁾」「一部は好奇心、一部は名声欲から、彼は広大なローマ帝国全土を訪ねて見たいという考えに取り憑かれた。それは前任者がだれ一人としてやったことのないことだった。(中略)たしかに彼のこの放浪癖は、訪問された属州のために役立った。というのは監察官のごとく、彼は自分の目で物事を見て賢明に吟味し、行政官がその義務をはたしているかどうか、公正を欠いてはいないかどうかを確かめ、もし行き過ぎがあればすべてに対策を講じたからである。この点で驚くべきことは、その活動力と配慮の周到さだけではなく、非行を行った役人たちを降格させたり別の形で罰した際のの一貫性であった。彼は各都市の全収入と税負担を知ることを望んだ。すべての城砦を訪問したが、それはよく管理されているかどうかを見るためで、不足なものがあれば補給を命じ、気に入らぬものは廃止させ、必要に応じて別の場所に新しい建物を建てさせた。²⁹⁾」「以前の君主や將軍たちの無頓着のため、多くの職権乱用が軍隊にまかり通っているのを見て、彼は断乎たる態度を取り、ローマ古来の規律の再建に着手した。士官の様々な任務やそれがなされる費用についてすぐれた命令を下した。(本来野外のテントで暮らすよう義務づけられていた)兵士たちの兵営から、柱廊、つる棚、洞穴その他の装飾を取り除いた。百人隊長(我々が capitano とよぶ)になるには良き評判と頑丈な肉体が必要だった。(我々が colonnello と呼んでいる)軍団司令官は、完全な若さとさらに分別とを兼ね備えていなければならなかった。軍団司令官は兵士から贈り物や貨幣を強要したり受取るとは許されなかった。その兵士自身についても、彼は注意深く彼らの武器、荷物および年齢をたしかめたが、それは17才以下で軍務に服す者がなく、また30才をこえても希望もしないのに軍務に留められる者がなくするようにするためだった。規律を正確に守る点で、彼は誰よりもまさっており、自らの法律を自らの実例で生きたものにした。彼は公衆と共に食べ、兵士たちが常食としているもの、つまり豚の脂身、チーズ、およびポスカとよばれる酔入りの水以外は摂らなかった。時折、武装したまま徒歩で20マイルも歩いた。彼の胸当には金はずけられず、バックルにも宝石はなく、剣のにぎりはただの象牙であった。病気の兵士たちを見舞い、野営の場所を設定した。とりわけ無駄な品物を買わぬよう、また無為の人たちに食糧を与えぬよう注意した。以上わずかな手がかりによっても、古代ローマ人

がその軍隊を訓練する際の賢明さが理解しうる。³⁰⁾」

(4) Antonio Pio 「Antonio Pio の治世は全く平和だった。何故ならこの最高の君主は野心を持たず、空しい栄誉など全く欲しがらず、もっぱら人民を幸福にするために専念したからだ。³¹⁾」

「A. P. は自然から長身の均整のとれた身体を恵まれ、威厳はあるがやさしい顔をしていた。その声は耳に快かった。会話でも快活だったが、度を過ぎなかった。自分のことでは儉約家だったが、必要に応じて気前良くなり、豪勢にも振舞った。田園にいることをとても楽しみ、そこで自分の財産を稔らせると共に、いつも狩猟や魚とりを楽しみ、市内では喜劇や道化芝居に興じた。禁酒に努め、皇帝になった後も常にそれを守り、普通の食事に満足して、珍味を求めたり、贅沢に耽ったりはしなかった。長命だったが、医者も薬も必要としなかった。彼の公私にわたる宴会の御馳走は、出席した友人たちの談話だった。彼も時折信頼しきった友人宅へ食事に出かけた。朝誰かを閲見に通す前に一切れの古いパンを食べるのが常だったが、それは仕事にかかるのに元気をつけるためだった。なお執務中は常に専念し、疲れを知らなかった。彼はまた私人として、友人たちのブドウ摘みに加わるのを好んだ。それは古代ローマ人にとても好まれた娯楽だった。皇帝はまた地味な服装をして、自分の身を飾り立てるような真似はしなかったが、清潔さや品位を忘れたりしなかった。時折偏頭痛におそわれたが、その発作がおさまるや否や、それ以前にもまして元気に仕事につくのだった。執務は毎日だった。というのは、常に自分の家の財産を点検している賢明な家父長と全く同様に、彼もまるで国家が自分自身の家でもあるかのように、一刻も休まずにその長所をのぼし、防衛に心をくだし、混乱や不足に対策を講じた。とても穏かにではあるが、ほんの些細なことまで正確に通じており（そのためある人々に、特に Giuliano Apostata の諷刺詩でからかわれた）、また見かけだけで満足せずに、事柄や人々の習慣や道理を徹底的に吟味した。しかしあらかじめ賢明な友人たちや学識豊かな助言者たちの意見を聞くことなしには決して事を進めなかった。だが一たび時機が熟して決定が下されると、その実施においては一貫して揺るぎがなかった。見世物や贈り物、建築物その他公共を楽しませたり美化する行為で人民を喜ばせはしたもの、民衆の喝采を求めるような真似は決してしなかった。だから民衆の方でも、彼に関して良い加減な判断を下したりはしなかった。彼は賞讃を求めてではなく、善をなすために善行を行った。だからへつらい者も彼の前ではことばを失った。また彼は、Adriano がそうだったように、自分よりも雄弁術や法律知識その他の学問芸術の分野で自分よりすぐれていると思われる者に嫉妬したりせず、むしろそういう人たちをすぐれている分だけほめ、喜んで勝を譲った。何よりも彼において賞讃されたのは宗教への愛である。それはたしかに誤った宗教だったが、不幸にも彼はそうした宗教の下で生れたのだ。³²⁾」

Marco Antonio 帝も以上の三帝に劣らぬ善帝だが、後に示す Commodus という悪帝を後継者に選んだことでその功績は帳消しにされる。以上の善帝への讃辞や Adriano への批判で M. の好み

(註)

ノート 1

- 1) その初版本については、本文中で後述。本論では、Opere del Muratori の Tomo XVI–XLII (全27巻)、Annali d'Italia di L. A. Muratori, Venezia 1970 年版を利用。「膨大な」と評したのは、各巻450–500ページ(Tomo XVI, XVII のみ400ページ以下) で27巻に及ぶからで、本論では TomoXVI–XXII の部分を用いた。
- 2) Gianfrancesco Soli Muratori, Vita del Proposto Lodovico Antonio Muratori già Bibliotecario del Serenissimo Sig. Duca di Modena, Venezia 1756.
- 3) id. pp. 93–4.
- 4) id. p. 94.
- 5) id. p. 135.
- 6) Epistolario di L. A. Muratori, edito e curato da Matteo Càmpori, Voll. I–XIV, Modena 1907, の Vol. IX p. 3813. なおページ数は全巻通してつけられている。
- 7) S. Bertelli, Erudizione e Storia in Lodovico Antonio Muratori, Napoli 1960, Cap. VI, Gli“Annali d'Italia”, p. 420. 註6) の手紙の方が早い。
- 8) 註6) の p. 3838.
- 9) 註6) の Vol. XIV. その巻末に、文通相手別の交信回数の一覧表がある。
- 10) id. p. 6090. なお p. 3813 より p. 4199 が Vol. IX, p. 4283 より p. 4707 が Vol. X, p. 4758 より p. 5167 が Vol. XI, それ以後は Vol. XII に収録されている。以下の引用ページ数が記されたものには註を省略する。
- 11) id. p. 4146.
- 12) id. p. 4148.
- 13) id. p. 4314.
- 14) id. p. 4329.
- 15) 註9) の一覧表, id. p. 7024.
- 16) id. p. 4654.
- 17) コマッキオの領有権をめぐる、M. はエステ家側に立ち、ローマの Fontanini らと、1708年より1720年までの長期にわたり、執拗な論争を続けた。教会国家の領有権を脅かす問題であったため、M. はローマ法王庁の心証を害し、公私共に悩まねばならなかった。
- 18) 当時の M. と法王庁およびローマ知識人との関係は、Michele Monaco, I Rapporti di L. A. Muratori con i «letterati» romani del suo tempo, (in L. A. Muratori e la cultura contemporanea, Firenze 1975, pp. 57–110) の III. Muratori e la cultura romana, d) III Fase にくわしい。
- 19) 註18) 参照。
- 20) id. pp. 99–100.
- 21) 註6) p. 4847.
- 22) id.
- 23) 註1) Tomo XLII の pp. 475–486 に conclusione がありその中で簡潔に弁明される。
- 24) 註6) p. 4907.
- 25) P. A. Vitale, Riflessioni sulle nuove scoperte di Lodovico Antonio Muratori per gli Annali d'Italia, Napoli 1749 についての言及。註2) p. 139 参照。
- 26) 註6) p. 5360.
- 27) 註18) p. 99.
- 28) 註2) p. 138.
- 29) 註7) の書物の Cap. VI.
- 30) Gaetano Compagnino 他, Dalla vecchia Italia alla cultura europea del Settecento, Roma-Bari 1973,

所収, G. Compagnino, Ludovico Antonio Muratori e la cultura del «buon gusto» pp. 177-217, 特に p. 202 の批評。

- 31) たとえば, Letteratura Italiana, I minori III, Milano 1974 所収の同氏の L. A. Muratori についての解説 (pp. 1875-1900) のこの作品に関する部分 (p. 1895, pp. 1897-8) で軽々しい非難をいましめ, 好意的意見を示す。
- 32) Carlo Calcaterra, L'azione ideale del Muratori nel risorgimento italiano, in "Convivium", Torino 1950. pp. 53-54.
- 33) 註31) の p. 1898 にロマン主義者の M. 評価が記されている。

ノート 2

- 1) Giulio Bertoni, L. A. Muratori, Roma 1926. の p. 32 はこの作品が後世に与えた功績を重視する。
- 2) Dizionario Critico della Letteratura Italiana, Vol. II, Torino 1973 所収の F. Forti による L. A. Muratori の項目の p. 661 の左段の記述。
- 3) 1973年刊。なお以下に挙げた R. S. I. は1723-38年全28巻, A. M. A. は1738-42年に全6巻で刊行された。
- 4) Bertelli, op. cit., p. 422 に引用。
- 5) id. p. 425.
- 6) Opere di L. A. Muratori, Milano-Napoli 1964, Tomo I の Introduzione p. XXXI.
- 7) id. なお註6) の Tomo II (pp.1017-1501) には, 本書の抄本が収録され, その本文480ページ中105ページ (21.87%) が帝政ローマを扱う。
- 8) 森田鉄郎, ロンゴバルディ 侵住建国をめぐる諸問題—イタリア民族形成史の一こま—, 『城西人文研究』第12号所収, 1985, 第II章に付せられた pp.11-2 の注参照。
- 9) C. Malaparte, 矢野秀訳, 『クーデターの技術』, 東京 1961, という翻訳が出ているが, 原著はフランス語で書かれた。
- 10) ノート1の註1) の Tomo XVI (この作品の Vol. I にあたる。以後混乱をさけるため, この作品の Vol. 数を挙げる) p. 1.
- 11) id. Vol. VII. p. 247.
- 12) id. pp. 347-8.
- 13) id. p. 248.
- 14) ノート 1 の註6) 参照。
- 15) ムラトリーの Cartesio, つまりデカルトへの関心は『科学および学芸における良識に関する反省』の第二部第十二章等にみとめられる。拙稿「L. A. ムラトリーとイタリアの学問の改革」, 『リソルジメント文化研究』, 京都 1978所収, p. 194.
- 16) 註10) の Vol. II, p. 250.
- 17) id. pp. 250-1.
- 18) id. p. 253.
- 19) id. p. 256.
- 20) id. pp. 256-7.
- 21) id. 258.
- 22) id. pp. 259-260.
- 23) id. p. 281.
- 24) id. p. 292.
- 25) id. p. 319.
- 26) id. p. 327.
- 27) id. p. 341.
- 28) id. p. 342.
- 29) id. Vol. III, pp. 3-4.
- 30) id. pp. 5-6.
- 31) id. pp. 63-4.
- 32) id. pp. 64-6.